



鳥越敦司 atushi torigoe



その結果は、・・・ロボットはオールスターに出場したのだった。 All-Star. アメリカの国防省だってロボットが大分いるといわれている。  
Oita.

もちろん先の戦争は国連問題となったのだが、国連の職員もみんなロボットなのだ。  
robot

ロボットは給料もいらぬし、故障すると他のロボットが修理することになっている。 Robot  
. 開発はアメリカでされたが、車と同様わが国でも近年はロボットの開発は目ざましい。  
robot

ある会社では重役をロボットにしたとか、パチンコ屋の従業員は、みなロボットだし、サラ金の取立てもロボットがする  
Pachinkoya Sara  
robot.

もちろん失業者は増えたが、大部分の人は余暇を楽しめるようになった。  
それは喜ばしい事だったのだが・・・。

そうそう、国連の問題を話さなければならない。  
結局国連では、中国の軍事ロボットのスイッチを切れという事になった。  
off

しかし、このロボットのスイッチは簡単には切れないのだ。  
robot

しかもリーダーのロボットを他の多数のロボットが守っている。  
robot  
。 これらのロボットをこわすには相当な国家予算をふいにする事になる。  
。



uyoban yo. ... grinning.  
と、話して大統領はニヤリと笑った。「あの中国の軍事ロボットも、ここホワイトハウスで操作していたのだし、核の雲を消す爆弾も我々の星のものさ。」  
「大統領、世界はやはり我々アメリカのものです。」  
と発言してCIA長官が立ち上がった。  
「そうだと。乾杯しよう。」  
と述べると大統領はグラスを取った。「日本に核戦争を仕掛ける日に。」  
「乾杯！」  
アメリカ合衆国首脳一同はグラスを合わせた。

無口な日本の首脳

時の首相は大変な無口で知られた人だった。長い文章は喋れないらしい。

「首相、大変です。今度は本当の核が・・・。」  
首相官邸にいた、わたしに、防衛大臣が電話してきた。  
「すぐ避難を！」

その後の電話の声を聞く前に、わたしは地下の核シェルターへ逃げた。十分後、日本の首脳は皆、核シェルターに集まった。

「首相、どうします？」  
日本の首脳に一同は、異口同音で聞いた。

「そうだな。われわれだけが生き延びればいいのか。とても勝ち目はないよ。」  
と、わたしは答えた。  
「そんな・・・。」  
首脳一同が、そう嘆くのを、わたしは上の空で聞いていた。

robot ....



<http://p.booklog.jp/book/106343>

著者：鳥越敦司 atushi torigoe

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dontanine/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106343>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106343>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ